
Lord of The Ring RPG リプレイ
『灰色港のファラシオン』

作・ACRAP（全千葉演戯向上会）
リプレイ清書・海保 研

目次

キャラクター紹介.....	3
本編.....	4
第1章 復活のゴルブラス.....	4
第2章 ゲーム前、最中はアルコール禁止。特に悪酔いする奴は！	7
第3章 水計炸裂.....	9
第4章 余裕持ちすぎ.....	14
第5章 ペレンノール動物園.....	16
第6章 バッカニア実質不戦敗	18
第7章 運命に決着を.....	23
第8章 その後、(略).....	28
シナリオ作成メモ.....	33

キャラクター紹介

- ◆ ファラシオン
やっぱり最後は帰ってきた主人公。めでたくもタイトルになりました。
- ◆ フドーリン
正しく「ファラシオンの相棒」として戦闘・ストーリー共に活躍。お疲れ様でした
- ◆ バッカニア
やっちゃった・・・中の人が今回アレじゃなければタイトルは『バックニアの帰還』になったのに
- ◆ ゴルブラス=ブレッカー=バギンズ
中々出番はないけど、いざ出番となったらシメる時はシメるぜのホビットらしい躍進ぶりでこの位置に。
- ◆ ジョンドレド
その後（略
- ◆ バラール（NPC）
最後はこの男との戦いに終始した。もう少し掘り下げてみたかったんだけどね。
- ◆ フェアリオン及びメセリオン（NPC）
どちらもアリオンの姉。エルフ巫女三姉妹という設定で、やりたかったのはキャッツ・アイ¹だが。ホント活かされなかった設定が多いです orz

¹ 『CAT'S EYE』（キャッツアイ）は、週刊少年ジャンプに連載された北条司の漫画作品。1983年にテレビアニメ化、その後、テレビドラマ化、実写版が映画化された。よっしゃ、いきなり脚注を使ってやったぜへへーん



本編

第1章 復活のゴルブラス

マスター「じゃ、始めますか。えーとー」

バックニア「おっす、オラバックニア！」

マスター「どうぞ」

バックニア「バックキーと呼んでくれ！」

ファラシオン「呼ばない」

マスター「呼ばない」

バックニア「呼んでくれ！なんと今回は最終回らしい！6話も続いてまさかここで最終回とは思わなかったけど、最後の最後までジョンドレドの奴は姿を現さなかったなあ(笑)」

ファラシオン「マシュマロ食べよう」

マスター「それ(テープに)入ってるぞ(笑)」

バックニア「まあ、何はともあれ最終回！バラールの野郎をとっちめてやるぜ！」

ファラシオン「マシュマロうまい」

バックニア「マシュマロ関係ないって！(笑)てことで、いざ出撃！」

マスター「なんだが・・・今君たちはどこにいるかはわからない。」

バックニア「バラールをやっつけたんでしょ。」

マスター「うむ。ちゃんと話すが、黒い剣と白い剣の謎を解きに過去の旅へ向かい、戻ってきたがそこにバラールが出てきて最後バラールはナズグルとなり黒い剣と共に去って行ってしまった」

フドーリン「あれ？何で俺は服を着ていないんだ？」

ファラシオン「それはお約束だろ(笑)」

ゴルブラス「俺も服を着ていないぞ(笑)」

バックニア「お前はいないし。つーか俺らは隣の国の情勢を調べに移動したわけで、お前はいないんだよね。」

マスター「そうだね。この場にいるのはファラシオン、バックニア、フドーリン。なんだがゴルブラスだけ先に解決してしまおう」

マスター「さてゴルブラスだが、前々回角笛城にいたので君はその場に留まっていたが、エルフ達がロリエンに帰るといっているので(何故か知らないが)ついていった。フロドが来たからいいだろう²。とかそんな感じ」

ファラシオン「お前は必要とされていなかったんだよ(笑)」

マスター「さらに角笛城の滞在中に一人のエルフと親しくなったのも理由としてある。すごい優しいエルフで名前をディオディアと言う。ハルディアのまたいとこという設定(笑)」

ディオディア「ゴルブラス君、ガラドリエル様の命により私達はロリエンに戻るのだが、一緒に行こうじゃないか」

ゴルブラス「何しに行くの？」

マスター「すると、約70人くらいのエルフが武装状態で待機をされていてー」

バックニア「囲まれた(笑)」

² よく考えたら、フロドは角笛城に行っていないね。

ゴルblas「これは俺一人では戦えないなあ」

ファラシオン「これと戦えと言ってんじゃない。一緒に戦えと言っているのだ。こんな小さな人と共に戦えと言うのですか！！」

マスター「誰だお前(笑)」

ゴルblas「小さいからってバカにするなよ」

マスター「ホビットを侮ってはいけない。小さいながらも決して侮れないということは証明済みではないかね。」

ファラシオン「しかし、目の当たりにしたわけでは！」

バックニア「そうです。聞くところによるとホビットと言えは食う寝る遊ぶしかないではないですか！」

ファラシオン「こいつも置いていきましょう(笑)」

ゴルblas「俺には新たな得意技がある！！！」

ファラシオン「何だ！」

ゴルblas「落下だ！！(笑)」

マスター「ということでゴルblasはディオディアの馬に乗り、ケレブランドの野に向かっていった」

ファラシオン「昔戦場だったとこだな」

マスター「更に、道々話を聞いたんだけど指輪戦争だが角笛城で勝って、そのうちペレンノール野での戦いが予想されるんだけど・・・わからないね。」

ファラシオン「最後だよ。オーランド・ブルーム³が大暴れしたやつだよ」

ゴルblas「ああ～！一人、二人とか言ってた奴？」

マスター「違うよ。象を倒してた奴だよ。」

ゴルblas「あったあった。象の鼻からズサーッと。俺もやりてえなあ。鼻からズサーって、そのままパクって(笑)」

マスター「さてその一方でオーク中心の200の部隊がロリエンに向かってしていると聞く。それを迎撃するのが今回の任務である。こっちは70人」

バックニア「こっちは200？」

マスター「違う。さて、ゴルblasとディオディアと一緒に到着した。エルフの部隊は既に実践配備されている。そこでディオディアが声をかけてきて」

ディオディア「さて、ゴルblas君。迎えにいかがか」

ゴルblas「ラジャ！」

マスター「と(ケレブランドの野の野営地から)馬で三日ほど進むとこの3人(ファラシオン達)が呆けている場所に着いた」

ゴルblas「何でお前裸なんだ！？(笑)」

バックニア「こいつはデフォルトで裸なんだ」

フドーリン「しょうがないな。着けておく。葉っぱを(笑)」

バックニア「レディーもいないしね」

マスター「おっと悪い、レディーいたんだ。この場にはディオディアと共に来たエルフの女性がもう一

³ レゴラスの役者ね。画像は敢えて『パイレーツ・オブ・カリビアン』から貼ってみる



人いるよ。フェアリオンという呪い師。アリオンの姉。」

ファラシオン「何!？」

バックニア「フェ・アリオン⁴だから?で、お前はアリオンを好きだったんだろ?」

ファラシオン「違うよ(笑)。」

マスター「と言う事で4人合流していいけど」

ファラシオン「お、お前はゴルブラスではないか!」

バックニア「ヨナンポーじゃないか!ヨナンポー、どこ行ってたんだ?」

ゴルブラス「わ、わかんない」

フドーリン「あんなに複雑骨折していたのにもう治ったのか(笑)」

ゴルブラス「複雑骨折どころか、穴だらけだったんだが(笑)」

バックニア「まさか、あんなところに穴があるとは思わなえなあ(マスターを見る)」

ファラシオン「俺は思ってたけどね(笑)」

フドーリン「投げたのは俺だから(笑)」

ゴルブラス「落ちたのは俺だから(笑)」

ディオディア「えーすいません。そろそろよろしいでしょうか。」

マスター「ディオディアは真面目という設定なので話を戻しますがー」

ゴルブラス「これはこれは、ディオディア様。」

ファラシオン「ロスロリエンの民と見うけるがー」

ディオディア「さようです。ファラシオン様。いよいよ決戦の時が近いのです。バラールことナズグル率いる200の部隊が進行中です。」

ファラシオン「なんと!」

ディオディア「我々はそれを迎え撃つべくケレブランドの野に配置しています。ただ、バラールを倒すためには貴方たちの持つ白い剣の力が必要不可欠。そこでこちらに迎えに来たのです」

ファラシオン「2本共お前が持ってるんだっけ?」

バックニア「いやー」

マスター「黒い剣は持ち去られた」

バックニア「白い剣は持っているけどね。」

ディオディア「エルフの駿馬を連れてきています。すぐにでもケレブランドの野に向かいましょう。」

バックニア「黒い剣は持ってかれるとまずいんですか?」

ディオディア「まずいです。ナズグルの手に黒い剣があるというのは、事によってはサルマン以上の脅威かもしれません。」

バックニア「それに対抗できるのは白い剣しかない、と。」

ゴルブラス「取られてしまった黒い剣の心配をしてもしょうがあるめえ。白い剣で奪われた黒い剣で対抗するしかないってことだね。」

フドーリン「その意見に乗った!」

⁴ フェアリオンの元ネタはスパロボ。残念だったな



⁵ とりあえずいつも以上にバックニアの発言はカットしています。お前はハリウッド映画の黒人かつての!まあ、この後の展開を考えれば消える前に強く光り輝いたってことになるが。

ゴルブラス「俺も乗った！」
バックニア「お前が提案したんじゃない(笑)」
ディオディア「いずれにしろバラールの部隊がロリエンに向かっています」
バックニア「それは見過ごすわけにもいかんだろう！灰色港！」
ファラシオン「だから、そう言ってんじゃない！お前は少し酔いを醒ましてから来い！！(笑)⁶」
ディオディア「ガラドリエル様は旅立ちの用意がありますので、我々70名だけで対抗しなければなりません。」
ファラシオン「あー、俺も旅立ちてえ。大丈夫だ。これで75名になる(笑)」
マスター「さて、~~タタ~~タタタタタタというところでケレブランの野に着いた」
バックニア「早いな！」
ファラシオン「亡霊が一杯いるな」
バックニア「ブルブルタタタ、ブルブルタタタ・・・」

第2章 ゲーム前、最中はアルコール禁止。特に悪酔いする奴は！

マスター「さて、その夜に作戦会議が催される」
ゴルブラス「一人一殺の方向で(笑)」
フドーリン「任せろ！！」
ファラシオン「アルスラーンよりはマシ(笑)⁷」
マスター「エルフ側の参加者は君らと指揮官であるディオディア、アリオンの姉であるフェアリオン。それともう一人。更にその上のメセリオンというエルフの女性がいる。アリオンが一番下だったんだね。」
バックニア「オンオン、リオンー！、リオンー！、メセリオンー！ファラシオンー、わは！」
ファラシオン「お前うるせーよ！！(笑)」
フドーリン「まだ覚めねーのか」
ファラシオン「それでこいつは莫舎の外にいるから(笑)」
マスター「で、今回オークの進撃を予見したのもメセリオン。この3人姉妹は巫女の家系で、特に長女メセリオンは目が見えない分予知の力がある。⁸」
ディオディア「敵の数は約200。オーク、ウルク・ハイ、死人から成る混成部隊とされます」
フドーリン「俺はオークで」
ファラシオン「俺もオーク。」
ゴルブラス「わしもオーク(笑)」
ディオディア「ウルク・ハイとかは・・・」
バックニア「ウルク・ハイはクマに任せた」
マスター「(聞き流して)で、作戦なんだが、ディオディア曰くー」
ディオディア「水攻めを行きましょう」
バックニア「水攻め？そんな事が出来る地形なんですか？」

地形では近くに河は流れています。

⁶ プレイ開始前にビール2, 3本あけやがってるこいつ。そのうち・・・

⁷ 『アルスラーン戦記』だね。田中芳樹による大河ファンタジー小説。1～10巻は角川書店の角川文庫より、11巻以降は光文社のカッパノベルズから刊行されている。ルシタニアに征服されたパルスを奪還するまでを描いた第一部(1～7巻)とかつてパルスを震撼させた蛇王ザッハークとその眷属たちとの戦いを描いた第二部(8巻～)がある。筆者の後書きによると、全14巻(第1部7巻、第2部7巻)の予定。(Wikipedia) アニメ版アルスラーン戦記第一話の最後で、ルシタニア軍5万に対して味方が5人という状態で、「一人あたり1万を相手にすれば良いのだ」とファランギースが(?)うそぶいた故事による。

⁸ PC達の帰還地点を予測したのも彼女の力

ディオディア「河の上流にエルフ十数名を派遣して水を堰き止めています。そして敵を誘き寄せ、半ば渡らしめて、水攻めを行います。⁹これで100対70くらいにはできるはずです。そこで貴方がたには敵を誘き寄せる役をお願いします」

フドーリン「これで200対70の劣勢を、100対35に！！(笑)」

バックニア「数が減っているだけマシか。で、その35という数字はどこから来たの？」

ファラシオン「70の半分だから・・・お前やっぱり酔っ払っているだろ！！(笑)」

マスター「君たち4人とフェアリオンも着いてきてくれる。これで囷役になるというわけだ。」

ファラシオン「しかと!承った！」

ディオディア「では明日明朝経ちますので今日はゆっくりと休まれるがよい。¹⁰」

マスター「で、あとおなじみの補給物資を用意しました」

ディオディア「これからナズグルと戦う事もありますので、これらのエルフの武具を用意しました。ご利用ください」

バックニア「お、エルフの武具だ。クリティカル入る」

マスター「と言って、まずは直径3cmほどの宝石。」

ディオディア「これはエルフの至宝『神秘の宝玉』です。一度しか使えませんが、使うと失われた命以外の状態を全て回復する事ができます。」

ファラシオン「なるほど、腕が一本モゲても！(笑)」

フドーリン「麻痺も！！」

ゴルブラス「首が飛んでもピョコン、と！」

マスター「即死には効かないからね。あとエルフの鎖帷子とローブをそれぞれ1着ずつ。いずれも防御、抵抗+15。ただし効力は1週間のみ」

バックニア「まあいいか。」

ファラシオン「ローブは俺がもらう。何故ならこの中でローブが似合う奴は俺しかいないから。」

フドーリン「てことは鎖帷子俺がもらっているのかな？」

バックニアは既に前回の補給で鎖帷子をもらっている

マスター「あとは魔力を回復させるドロップをもらいました。」

ファラシオン「やった！」

マスター「ただ食べるとすごく辛いので打撃1～10を受けてしまう。ただしその半分だけ魔力を回復する」

ゴルブラス「いっぺんに食うと(笑)」

フドーリン「大丈夫大丈夫。神秘の宝玉あるから(笑)」

マスター「それからアセラスを5枚。ナズグルから受けた傷を回復させる」

バックニア「一人一枚でいいんじゃない？」

マスター「ただ、『より完全な力を発揮するには神によって定められた王の手が必要』だから・・・」

ファラシオン「あ、そうか！アラゴルンに頼まないと¹¹」

マスター「まあ、対ナズグルの応急処置くらいかな。あとはエルフの弓と矢。+10の弓と+5の矢が10本」

フドーリン「(ゴルブラス) お前が持て」

マスター「ゴルブラス用だよね・・・マスターが思うに。これ位ないと何も活躍できないと思うし(笑)」

最終的にゴルブラスが持つ事になった。

⁹ 『半ば渡らしめてこれを撃つは利なり』(孫子)が元ネタ。教養あるねえ

¹⁰ ファラシオンの口調に引っ張られています。

¹¹ 知らないだろ。キャラクターは。

マスター「さて、ということで君たちは補給物資にウキウキしてー」
バックニア「ウキウキしてないよ」
ファラシオン「俺してるよ」
フドーリン「してるよ¹²」
ゴルブラス「お前だけだよウキウキしてないの(笑)」
ディオディア「さて、今晚はどうしましょ？」
ファラシオン「見張りでもするか。」
フドーリン「白い剣が奪われてもコトだしな。」

見張りの甲斐もなく、無事に翌朝になった。

マスター「翌朝。君らはフェアリオン達と馬でケレブランド野の南東に向かいました。」
ファラシオン「俺達は河をわたるの？」
マスター「そう。今は水は(水計のために)引いているからね。で、渡れる浅瀬を見つけて、そこで待つ事になる。」
ファラシオン「ここから本隊は見えないの？」
マスター「見えないね。けど、前進はしているよ。」
ファラシオン「じゃあそうだな・・・じゃあ野営してるっぽく、人間の営みをちょっと作るか。」
マスター「ん。」
フドーリン「誘き寄せるため」
バックニア「じゃあ火をたくか？」
フドーリン「分かり易く狼煙を上げるか。」
ファラシオン「朝餉のように(笑)」

第3章 水計炸裂

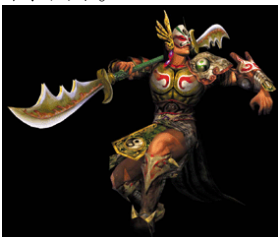
マスター「さて、そうしていると・・・南、河の向こうから進軍の音が聞こえる」
ファラシオン「むっ！！フェアリオン、来たな・・・」
フェアリオン「来ましたね」
ゴルブラス「冷静だな」
ファラシオン「合図ってどうすんだっけ？」
フェアリオン「私達 3 姉妹の間で通じる合図がありますので送りました(笑)水攻めの合図じゃないよ。1つめの合図で敵の来襲を告げて、2つめで水攻めを行い、3つめで攻撃を行います。」
マスター「という事になっていた。」
バックニア「レディー、ゴー！癒着！」
ファラシオン「俺達は河の向こう側で待っているのか？」
フェアリオン「いや、河のこちら側で敵を誘き寄せて、あとは逃げてください」
ファラシオン「どこへ？」
ゴルブラス「逆側になってことしょ？てことはうっかりすると俺達は流される」
バックニア「それを狙ってるんでしょ？」
ゴルブラス「いやいやいやいや・・・何をおっしゃる・・・(笑)」
フドーリン「お前も落下したり流されたり大変だな(笑)」
ゴルブラス「予定は未定なんだよ(笑)」
ファラシオン「とりあえず弓構えてようぜ」

¹² 端的に言うとバックニアの中身が酔ってウザいのでみんなから嫌われている

ゴルブラス「おう。じゃ、構える」
マスター「そうすると、エルフの目だと見えるんだけど遠くにー」
バックニア「ちょっと待て！それはサイコロ振らせてくれないの？」
ファラシオン「うるせーな、大勢に影響ねーよ！(笑)」
マスター「うん、ない。オーク、ウルク・ハイ、死人の軍勢です。」
ファラシオン「ウルク・ハイは何人いるの？」
マスター「あまり多くない、2割ってとこだな。」
バックニア「死人は？」
マスター「それも2割。まあオーク、ウルク・ハイ、死人で4：2：2ってとこだね。¹³」
バックニア「どっちにしる歯が立たん」
ファラシオン「当たり前じゃん。何だこいつ(笑)そっち持ってってくんない？」
フドーリン「お前が主役じゃないのかなあ・・・」
マスター「で、バラールも後ろから馬に乗って迫ってきている」
フドーリン「バラアアアアアル！！見えないけどね(笑)」
ファラシオン「どうどうどうどう、まだダメだぞ！」
フェアリオン「一旦退くんですからね、分かってますね？一旦退くんですよ！」
フドーリン「それは保証できんな！」
ファラシオン「ダメレ・・・ワレ・・・タタカウ！(笑)」
バックニア「魏延かい！¹⁴(笑)」
マスター「さて、君たち全員とオーク双方に発見し、オークは堰を切ったようにこっちに殺到してきた。」
ファラシオン「やべ、逃げた方がいいなこりゃ。」
ゴルブラス「逃げるべ、普通。」
ファラシオン「オーク足速いんだ！」
マスター「まあ君たちは馬だしね。」
ファラシオン「フェアリオン、合図を頼む！！・・・あ、まだか(笑)。どれくらいで出せばいいんだろ？」
ゴルブラス「俺らが河のはじっこに行ったらじゃないの？」
マスター「いや。水が来るラグがあるから半分くらいで」
ファラシオン「じゃあ、敵の2割が過ぎたくらいだな。そこで水攻めを始めて、先頭集団が渡りきってから、真ん中を流して、残りは孤立。」
ゴルブラス「先頭だけ流しても全く意味ねーしな」
ファラシオン「そこらへんはファジーモードで頼むわ(笑)。」
マスター「了解(笑)さてと、君たちは矢を2,3本射掛けられるから、それを避けてください」
バックニア「えー！？いい加減だなあ」
マスター「まあ、距離も離れているし、こっちも走ってるから運が悪くなければあたらないよ・・・
(サイコロを振る)ゴルブラス。98が出ちゃった。」

¹³ あれ？残り2割は？なんで誰もツッコまないの？

¹⁴ 三国無双より。魏延は異民族の戦士という設定。カタコト、恐らく頭も良くない。とりあえずC3,C4,無双ともに高性能なので使いやすいのだが、キャラ立てがこんななので万人に受けるわけではない。ちなみにマスターの持ちキャラは関平、周泰。



バックニア「相変わらずおいしい所を持っていくな」

ゴルブラス自身の防御ボーナスは高かったが7点のダメージ

フドーリン「不幸な奴よのう」

ゴルブラス「人気者は困るなあ」

ファラシオン「どうしてあんなに小さいのに当たるんだ？(笑)」

フドーリン「俺の3分の2の大きさだよ」

マスター「前腕に軽傷、毎ラウンド打撃1、1ラウンド麻痺。」

ファラシオン「落馬する？」

マスター「いや、(ホビットで小さいから)誰かの馬に乗っているだろう。」

ファラシオン「じゃあ俺の背中に。俺に当たる代わりにゴルブラスに当たったんだ(笑)大丈夫か！ゴルブラス！(笑)」

ゴルブラス「肉のカーテン！！(笑)¹⁵」

フドーリン「俺は後ろからすげえなあ！って思ってるから、馬でもファラシオンでもなくなんでゴルブラス(笑)」

ゴルブラス「さて、軽くゴルブラスがダメージを受けたところで君たちは河を渡り始めた」

ファラシオン「逃げろー！」

バックニア「エッホ、エッホ、エッホ、エッホ、エッホ、エッホ、エッホ、エッホ、」

マスター「フェアリオンがすかさず第2の合図を送った。ところで、もう少しペースが早い方がいいんじゃないかな？(笑)」

バックニア「今のところ挿絵入れてくださーい。」

マスター「・・・え？」

ファラシオン「無理だよ！(笑)¹⁶」

マスター「じゃ次行こうか！(笑)君達は河を渡りきった。オークが何匹か追ってきているが、遠くの方でドドドドという音が聞こえー」

ファラシオン「今だー！フェアリオン！」

メセリオン「もう来ています」

フドーリン「さすがファジーモード(笑)」

マスター「では10秒、1ラウンド粘ってください。追ってきているオークを食い止めます。10秒もすれば彼らを飲み込むはずですよ」

ファラシオン「じゃあ、踵をくるっと返して¹⁷」

バックニア「返してってところだけハモったな。」

フドーリン「・・・いや、ハモってないよ。幻聴まで聞こえてきたのか？(笑)¹⁸」

ということで、敵の先頭集団であるオーク5匹、ウルク・ハイ、死人各1匹を相手にする

¹⁵『キン肉マン』より。キン肉族王家に伝わる防御術。手を前に組むとダイヤモンド並の硬度を獲得する。もちろん、キン肉マンだからできるのであって、俺ら素人がやっても硬度は獲得できません。



¹⁶いきなり挿絵とか言われても・・・考えなしにバックニアのプレイヤーが発言しているのが問題

¹⁷ふと思ったが、コレって逃げるときに使うんじゃないか？

¹⁸ごめん、後から確認してもハモってないよ。

事になった。

バックニア「オーク 1 匹にいきます。オークは任せろ！」

ゴルブラス「ジャンケンで決めようぜえ」

ファラシオン「俺の馬はゴルブラスが弓が当たったせいで遅れてるんだろうな。やばい事になってる？」

フドーリン「いや、俺がそれを後ろから追ってるから」

マスター「・・・まあ、キャラクター考えてもフドーリンが殿軍（しんがり）なんだろうなあ」

フドーリン「馬が俺の体重を支えられないんだ(笑)」

マスター「で、状況はこんな感じね (図 1 戦況 (ドラクエ風))」

ゴルブラス「じゃあ、俺達ウルク・ハイ？」

ファラシオン「俺達ウルク・ハーイ(笑)」

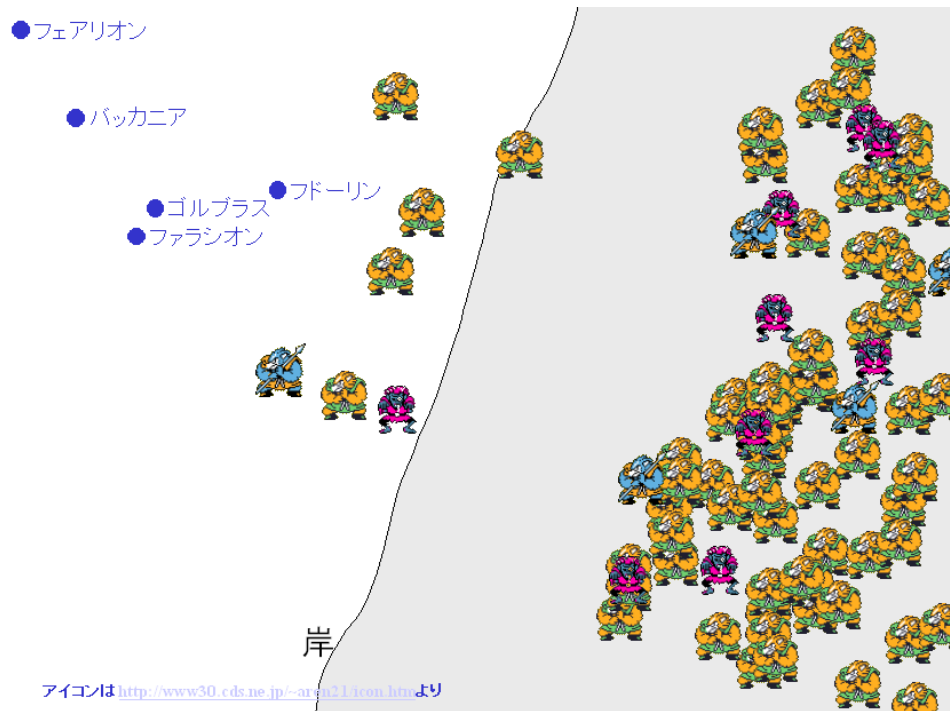


図 1 戦況 (ドラクエ風)

マスター「1 ラウンド粘ればいい。全滅させる必要ない。河に落ちさえしなければ(笑)」

バックニア「いや、その可能性は非常に高い」

ゴルブラス「河後ろなんだから。大丈夫でしょ？」

バックニア「どうかな？」

ということで、戦闘開始となる。まずはバックニア

バックニア「手近なオークに攻撃するよ。」

マスター「どうぞ、あ、オークは完全武装 (フルアーマー) だった。」

11 点のダメージと痛打は・・・

マスター「太股の片方に切りつける、及び軽い火傷。まあ、麻痺はしなかった」

フドーリン「じゃあ、バックニアに向かうオークを押さえつけようとして待つよ。」

一方でバックニアに攻撃されたオークの反撃。

マスター「ハンマーでの直撃を受けた！20点のダメージと痛打・・・片膝を砕く。行動力-60。転倒し、3ラウンド麻痺」

バッカニア「次のラウンドに神秘の宝玉を使うしかないか」

マスター「バカみたいに、突出するから・・・」

バッカニア「酔っ払ってるからわかんねえんだよ！」

続いてオークの行動だがその前に待っていたフドーリンが攻撃する。この一撃で19点のダメージを与え、更に片足を砕いてオークを倒した。

マスター「じゃあ、今のオークは行動できず終了だな。続いて別のオークが向かってきてフドーリンに攻撃するね。」

フドーリン「おらこいや～俺のこれからの1週間は強いぜ！」

15点のダメージを与え、前腕への一撃で1ラウンド麻痺

フドーリン「麻痺っちゃった・・・」

さらにウルク・ハイの行動が続き、弓をつがえる。

ゴルブラス「ウルク・ハイごときに負けるわけにはいかないな。」

そして最後のオークが続く。バッカニアへの攻撃

バッカニア「俺何も出来ないし・・・」

マスター「死んじゃうかもな。22点のダメージ」

バッカニア「ゲェ————ッ！！死ぬっちゅうの」

ファラシオン「さらばバッカニア・・・お前はバカだった・・・」

マスター「更に痛打。肩の骨が折れた。」

フドーリン「こりゃやっぱり神秘の宝玉しかないのか。」

更に残ったオークはファラシオンに向かう。対してPC達だがファラシオンは呪文準備、ゴルブラスは弓をつがえる、フェアリオンは・・・

マスター「弓つがえて終了。」

フドーリン「このバッカニアを見て弓をつがえるところが素晴らしい(笑)」

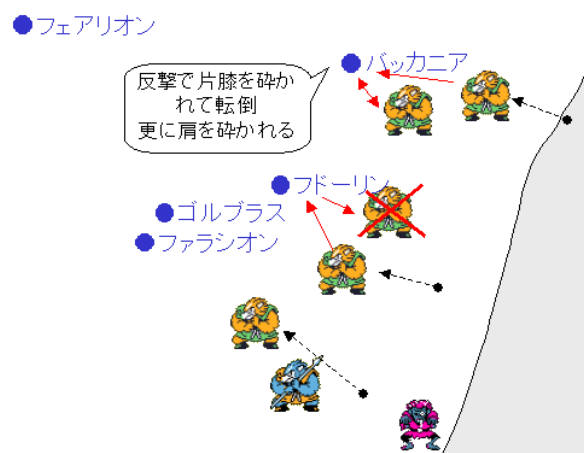


図 2 結果。バッカニア重傷

マスター「さて、1ラウンド後（図 2 結果。バッカニア重傷）に。ザッパーン、ドドドドと水が流れてきました」

ゴルブラス「やばい、飛び込まないと」

フドーリン「もう敵は背水の陣だから凄いい勢いで攻めてくるよ」

ゴルブラス「余計な事言うな」

マスター「で、一方で君たちの方から何人かのエルフが現れる。皆弓を構えている。」

ファラシオン「すまん、1ラウンド持たなかった！（笑）」

マスター「もう1ラウンドいく？いかなくていいか。君たちの後ろからビビビビビッと弓が放たれてー」

ファラシオン「うお！あぶねえ！」

ゴルブラス「バッカニアに当たったりして。」

マスター「（それもあるか・・・？）まあ、エルフだから当たらなかったことにしよう」

ファラシオン「エルフだからね。」

フドーリン「エルフだからな！」

マスター「ウルク・ハイと死人は当たって後ろに下がり、河に巻き込まれていった」

ファラシオン「どうだ、見たか！（笑）」

フェアリオン「合流してください！」

マスター「ということで、下がる・・・のだが、下がれない奴が約一名いるんだけどどうしたらいい？（笑）」

フドーリン「じゃあ俺がかついでいったことにするよ」

マスター「じゃあフドーリンがかついでいったことにする。で、河を境にして対陣し、エルフ達は矢を放っている。しばらくして水攻めが終わって水も引き、敵の数も60~70程度になって、渡ってきた」

ファラシオン「進軍。我に続け！」

マスター「ところがだ、馬に乗って向かってくる黒い乗り手が・・・」

ファラシオン「ヤダ」

バッカニア「やだなあ〜！」

マスター「バラール。」

フドーリン「やべえ、俺河を渡っちゃいそう。」

ファラシオン「ナズグルの形なの？」

マスター「もちろん」

フドーリン「じゃあバラールッと言いながら弓を撃つよ」

しかし、マトモに当たらず

バッカニア「ナズグルだから二指真空把¹⁹」

フドーリン「返ってくるじゃん！！（笑）」

マスター「さて、バラールは何も言わず黒い剣を抜き放ち、君たちの方に突進してくる！」

第4章 余裕持ちすぎ

ゴルブラス「俺は矢を撃つよ」

ファラシオン「俺呪文かけていい？」

マスター「もちろん」

バッカニア「俺は白い剣を抜くかな。」

マスター「どうぞどうぞ、向かってくる間だけ好きにやらせてやる」

¹⁹ボウガン、ナイフなどの飛び道具を人差し指と中指で挟み込み、飛んできた方向へと投げ返す北斗神拳の技。ラオウ、ケンシロウが好んで使用した。（『北斗の拳』）

ファラシオン「じゃあ『火弾』を撃つ。」

ゴルブラス「かだん？」

ファラシオン「ヒビヤカダン！！(笑)」

ゴルブラスの放った矢は普通のダメージを与える。

ファラシオン「じゃあ俺のヒビヤカダンも解決してくれ。ちなみにヒビヤカダンは全部カタカナだからね」

ファラシオンの放った炎の弾はナズグルと化したバラールにする直撃する。ダメージは20点さらに痛打のサイコロの目が80と非常に高い目になる。

マスター「お！それ足して100だな・・・吹き付けた熱風が脊髄を溶かし衣服と皮膚を付着する。首から下は一生動かない。」

バックニア「やった、決まった！」

マスター「さて、ファラシオンの火弾はバラールの顔面を直撃し、バラールは馬から落ちた。」

ファラシオン「死んじゃうね。きっと！」

バックニア「最近活躍してなかったけど、ここで見せたね」

バラール「やるな」

マスター「と立ち上がり、今度はゆっくりと君たちに向かって歩いてくる」

ファラシオン「あ、ああああ・・・ああ・・・ああ・・・(笑)」

マスター「もう顔から火が吹いていますけど・・・」

フドーリン「じゃあ、その顔面に向かって手近にある岩を投げつける！」

更にフドーリンの追い討ち・・・しかし

マスター「あさって(笑)」

バックニア「よし！じゃあ更に白い剣で攻撃する！」

マスター「足」

ゴルブラス「肩が死んで、片腕が使えないんだぞ、片足も折れてるし。頭突きをかましにいくんだよ」

マスター「そんななんだから、マスター的にダメだよ。もちろん、神秘の宝玉を使ってもいいんだよ。このラウンドそれで使ってもらうけど。」

バックニア「じゃあそうする。」

マスター「じゃあ五体が回復してピンピンする」

ゴルブラス「脳みそは治らないの？」

マスター「(笑)中のやつがなあ・・・飲んじゃってるからさあ・・・(笑)」

ファラシオン「グダグダなんだな」

マスター「さて、バラールが徒歩に切り替えたために接近するまで時間がかかるんだけど、どうする？」

とはいえ、ゴルブラスとファラシオンはそれぞれ準備（呪文および矢）となり、バックニアは回復した体で突撃する。これが無限ロールとなる。

マスター「わあい。33点のダメージ、痛打は・・・ちょっと待て、81？それもすごいんだよ。足を焼く。バラールは片膝をついた」

フドーリン「お前と一緒にあったな」

バックニア「俺はもうピンピンしてるから。やってくれたな、この野郎！」

ゴルブラス「別にこいつがやったわけじゃない」

フドーリン「お前はオークにやられたの！(笑)勘違いするな！(笑)」

マスター「さて、次のラウンド、バラールなんだが」

バラール「中々やるな・・・ここまでだ」
マスター「と合図をすると、上から空から鳥かドラゴンに似た鳥が舞い降りてきた」
バックニア「ずるいよなあ」
マスター「とそしてそれに乗った」
バラール「ペレンノール野でケリをつけよう」
マスター「と言うと去っていった・・・」
バックニア「逃げるのかあ!？」
フドーリン「もちろん俺は岩を投げるよ」

フドーリンは岩を投げ、ゴルブラスも矢を撃つがお約束で殆ど意味ナシ、と思われたが・・・ファラシオンがなんと無限ロール

ファラシオン「ふおああああ、ふつあああああ!!!177!」
マスター「そう来たか・・・どっちがいい? 獣、バラール?」
ファラシオン「じゃバラール。」
フドーリン「落ちればいいし」
マスター「20点のダメージと、痛打は?」
ファラシオン「・・・80! ｷｯ————(°▽°)————ッ!!」
マスター「胸にモロに命中した。獣の上でバタッと倒れたけど、まあ獣にしっかり乗っていたし、落ちなかった。そして去っていった。」

マスター「気がつけばこのケレブランドの野も終息している。」
メセリオン「では、みなさんはペレンノール野に向かってください」
ゴルブラス「他のみなさんは?」
メセリオン「我々は体勢を整えてから追います」
ゴルブラス「じゃあ、一足先に行きますか。」

第5章 ペレンノール動物園

マスター「で、テテテテテテと言いながらアンデュインを下り、遠くから見たんだがペレンノール野の戦いは始まっている」
ファラシオン「遅かったか!」
マスター「で、シーンの的には象がいるくらい」



図 3 じゅうがいる!!

ファラシオン「“じゅう” がいる!! (図 3 じゅうがいる!!)」
ゴルブラス「ここはもうダメだ! 撤退!! (笑)」

ディオディア「では参りましょう！」
マスター「といい、戦いに参加していった。」
ゴルブラス「俺も弓を構えて遠巻きから撃つよ」
マスター「しかし、この規模の戦いなので50人加わったくらいではどうにもならないのはどうしようもないところ。」
ゴルブラス「しかしそんな中でも目立っているのがレゴラス！(笑)」
バックニア「それはない」
ゴルブラス「あいつすげえなあ・・・」
マスター「で、君たちの周りにも」
ファラシオン「“じゅう”が殺到してきた！！(笑)」
フドーリン「“じゅう”殺到ッ！？さすがのクマでも敵わん！！」
ディオディア「その獣をお願いします！」
ファラシオン「ええー……ッ！？」
フドーリン「無理だぁー……ッ！！！！(笑)」
マスター「大丈夫だよ。レベル7だし。と言うことで襲いかかってきた」

ということで、成り行きでムマーキル（じゅう）を相手にする事になった。まずはゴルブラスの先制の弓矢だが、まず当たらず。

マスター「避けられた！！」
フドーリン「じゅうに？(笑)」
ファラシオン「よし、俺がじゅうを混乱させてやろう。俺の火弾で。ヒビヤカダン！！(笑)」

この攻撃は13点のダメージを与えたが、痛打がしょぼかった

マスター「熱はすごいが大した事ない」
ファラシオン「大丈夫。動物は熱に弱いから」
(ゴルブラス「バックニアの本体が（酔いつぶれて）死亡しております」)
(バックニア「そんなことないよ〜」)
マスター「ちょっと怯むくらいだなあ・・・他には？」
フドーリン「周りの奴らを薙ぎ倒しているよ・・・サイコロは84」
マスター「周りを一気に7匹くらい薙ぎ倒した。」
フドーリン「7あ！とか言ってるよ」
バックニア「じゃあ俺も続くか」

こっちは6匹

バックニア「6！とかいいながら」
マスター「さて、ムマーキル（じゅう）が攻撃してくるけどいいかな？」
フドーリン「誰を？」
ファラシオン「(俺たちは)遠いよ」
フドーリン「俺はこいつらをガードしているから」
マスター「(判定を行う)・・・じゃあ、フドーリンを踏んできました」
フドーリン「大丈夫、俺支えられるから(笑)」
マスター「(攻撃のサイコロを振る)ごめん、しくじった。えーと、多分効いていたんだと思う」
ファラシオン「ヒビヤカダンが」
マスター「そう、で躓いた。で、転倒した」
フドーリン「そっちの方が怖い！(笑)逃げろ〜！！」

マスター「さーて、倒れてきました。みんな、＜移動と運動＞で避けてくれ。遠くにいるゴルブラスとファラシオンは難易度を下げるよ。」

このフラックな攻撃の被害をモロに受けたのは体に合わない防具をつけて、＜移動と運動＞が低かったゴルブラス

マスター「フドーリンはちょっとかすめた位で3点のダメージ、でゴルブラスは倒れた“じゅう”の衝撃で吹っ飛んだ。転倒、15点のダメージ。しかし、ということで、結果として“じゅう”を倒した？(笑)」

ゴルブラス「俺は倒された」

ファラシオン「ズズーン、ホビーーーー！！(笑)」

マスター「周りはまだ戦闘が続いている状況。もう1ラウンドくらい何かしてもいいよ」

ゴルブラス「起き上がる！(笑)」

ファラシオン「ナズグルを探す。」

マスター「うむ、いいところをついてきたね。遠くの方にナズグルがいる」

ファラシオン「ああ、あそこに！バラール？」

マスター「いや、バラールではない。ナズグルの王が現れて、姫様に攻撃しようとして、空飛ぶ獣が攻撃しようとしたが姫様は一撃で首を落とし、ナズグルは地上に降りた」

ナズグルの王「私を倒せるのはー」

ファラシオン「人間の男の勇者のみ！」

マスター「そうそう。とか言いながらモーニングむすー」

ゴルブラス「モーニング娘はふるわねーぞ！(笑)」

マスター「モーニングスターを振り回して、姫様を攻撃します。²⁰で、盾とか砕かれたりしたんだけど最後は姫様が倒して、ホビットがなんか刺してナズグルの王は断末魔をあげて消えていった」

ファラシオン「おおおおっ！あれはなんだ？」

フドーリン「ヨナンポーいつの間に！」

ゴルブラス「俺力強く起き上がったところだから(笑)」

マスター「さてそうすると、ナズグル達は散を乱し、他のナズグルも現れた。その中にバラールもいる。

バラールはこちらを認めると舞い降りてくる」

バラール「借りを返す」

フドーリン「遠慮すんな、借りなんかいらねーよ」

第6章 バッカニア実質不戦敗

ということでいよいよバラールとの最終決戦が始まった。ちなみに、このタイミングでバッカニアのプレイヤーはアルコールが回ってダウン。イニシアチブのサイコロもマトモに振れない状況

ファラシオン「ありえねえ・・・こんなプレイありえねえ・・・今までのRPG人生の中でもこんな状況ありえねえ・・・(笑)」

フドーリン「寝るなお前(笑)」

マスター「さて、イニシアチブ的にはバラール側だね。バラールの乗っている『恐るべき獣』が攻撃してくる・・・フドーリン。」

フドーリン「はいよ。」

マスター「5点のダメージ。カスった。獣の急降下による攻撃でフドーリンをかすめ、反対側に飛び立

²⁰ これは映画版『ロード・オブ・ザ・リング』のクライマックスのエオウィンとナズグルの王、それとメリーの対決シーンですね。

っていった。」

フドーリン「バラールは降りてるの？」

マスター「いや、まだ獣の上にいる。次は？」

ファラシオン「バックニアじゃない？」

しかしバックニアのプレイヤーは今度は飲みすぎでトイレ中

マスター「まあ問題は向こうは空を飛んでいるってことなんだけどね。」

ゴルブラス「そうか、じゃあエルフの弓矢を使うか。」

フドーリン「今まで使ってなかったのか!？」

ゴルブラス「まだ最終決戦じゃなかったし」

フドーリン「別に矢は普通でいいんだよ。」

ゴルブラス「……………そりゃそうだ。(笑)」

マスター「そうだよ。俺も当然、そうしてるものかと……………」

こんな会話の最中、バックニアのプレイヤーがいないので仕方なくファラシオンのプレイヤーがつとめる。

ファラシオン「バックニアは攻撃ができない事に気づいて、次にナズグルが急降下をしてきた時に攻撃できるようにタイミングを待ち受けるよ」

マスター「急に賢くなったような気がするけど(笑)じゃあ、ゴルブラス撃つなら撃っていいよ。」

ゴルブラス「10の位を黄色に変える……………えい！」

しかし結果は無情にも18。ダイスの振り分けを変えていなければ出目81だった。

ファラシオン「宣言してしまったからな……………」

フドーリン「さすがゴルブラス！」

マスター「外した……………次どうぞ。ファラシオンは呪文準備？」

ファラシオン「うむ。」

フドーリン「じゃあ、俺は弓持ち替えよう。」

マスター「さて、フェアリオン何かしようかなあ……………ああ。＜獣の眠り＞があったなあ。対象の獣1体を眠らせる」

フェアリオンが状況を好転させるために＜獣の眠り＞をかける。バラールの獣は抵抗をす。結果、獣の方が抵抗に成功してしまった。

マスター「抵抗成功しました。＜獣の眠り＞失敗。で、次のラウンドだな。」

フドーリンは弓を構え、ファラシオンは呪文準備を行い、バカの一つ覚えの＜火弾＞！

ファラシオン「ヒビヤカダン！死ねい今度こそ死ねいバラール！お師匠様の仇——ッ！」

出目は95これにより、13点のダメージと

ファラシオン「落ちろ————ッ！」

マスター「火が背中を包む、倒れる。毎ラウンド打撃……………落ちた。」

ファラシオン「やったあ！落ちた！」

マスター「でバラールは起き上がって終わりだな。他は？」

フドーリン「フェアリオンは？」

マスター「呪文準備」

ゴルブラス「俺は弓をつがえて終了だな」

バックニア（ファラシオン）「じゃあ待ち構えてたけど、待ち構えられなくなったから走ってバラールに攻撃だな」

バックニアの攻撃。出目は大した事ないがボーナスが高く、かすり傷は与えた。

ゴルブラス「中身がボンクラじゃなければなあ(笑)」

次のラウンド、まずフドーリンは弓を撃つが当たらない

フドーリン「やはり当たらぬか」

バラール「お前はやはり斧で来い！」

フドーリン「じゃもう、撃った後投げ捨てるから(笑)」

マスター「バラールの番だね？ 召喚しまーす」

フドーリン「召喚準備は？」

マスター「・・・召喚準備(笑)」

ファラシオン「どう考えても魔法撃つより召喚の方が時間かかるもんな！」

ファラシオンは呪文を準備し、バックニア（ファラシオン）は再び攻撃。これもカスったのみ。ゴルブラスは弓矢を撃つがまたしても当たらない。出目がよくない。ことごとくダイスの目が裏目になってしまっている。

フドーリン「フェアリオンは？」

マスター「呪文準備のまま、誰かが負傷したら回復するよ」

ゴルブラス「なるほど。」

次のラウンドはフドーリンは弓を斧に持ち替えて終了。バラールは召喚を行うが・・・

マスター「召喚しました。見覚えがあります。」

ファラシオン「え？」

マスター「三度・・・アマーギンが・・・」

ファラシオン「ああああ・・・あ・・・ああ・・・ああ(笑)お前（ゴルブラスに向かって）わかってる？」

ゴルブラス「お前の師匠だろ？」

ファラシオン「違う違う、何の真似をしているかだよ、クリリンの真似だよ。そっちが重要なんだよ」

ゴルブラス「？」

ファラシオン「ダメだ、話になんねえや(笑)」

アマーギン「ファラシオン、あなたもいい加減死になさ——いッ！！」

ファラシオン「それはこっちのセリフだ！(笑)もう貴方の事を師匠とは呼ばないッ！」

フドーリン「俺らは一回死ねばいいんだよ！」

マスター「というわけでアマーギンが出てきました。」

ファラシオン「次は俺の番だな、バラールに<光弾>撃ちます。魔力勿体無いしね」

マスター「ドロップあるんだろお？」

ファラシオン「今度は光弾でもくらえ！いかにも違う技みたいに！(笑)²¹」

フドーリン「シブヤカダン！(笑)」

ファラシオン「いや、<光弾>だから。『赤い光弾』」

フドーリン「ジリオン？(笑)²²」

²¹ 確かに違う技なのは間違いないが、威力がずっと落ちる。火弾をメラゾーマとすると、光弾はせいぜいギラ。

²² 『赤い光弾ジリオン』（あかいこうだんジリオン, Red Photon Zillion）は、1987年4月12日から同年12月13日にわ

この光弾は8点のダメージと痛打が

マスター「髪の毛が逆立つ！ないけどね！(笑)」

無言でバッカニアは攻撃し続ける（フドーリン「中身が変わってから大活躍(笑)」）小ダメージではあるがじわじわと蓄積し続けている。痛打は軽い骨折と軽い火傷。ちなみにナズグルなので骨折は意味が無い。

マスター「以上、と。あとは？」

ゴルブラス「弓をつがえる」

で終了して次のラウンドになる。ちなみに、バッカニアは未だにトイレ中。別にプレイヤーみんな心配はしていない。先制攻撃はバラールがバッカニアに攻撃を行う。

マスター「33点のダメージと、痛打が・・・太股に中程度の傷。行動力-10、2ラウンド麻痺！」

ファラシオン「もうこいつあの玉ないよ」

マスター「それと・・・」

フドーリン「それと？」

マスター「こっちは白い剣に対抗して黒い剣なのだから冷痛打があります。背中を・・・凍らす？打撃+9毎ラウンド打撃2、2ラウンド麻痺。背中にあった木造物は全て使えなくなる。」

フドーリン「合計4ラウンドか・・・」

マスター「はい退場！バラールは一撃でバッカニアを吹っ飛ばした。」

フドーリン「攻撃対象から外れるから大丈夫だ」

ゴルブラス「いや、徹底的に潰してくると(笑)」

ファラシオン「ひえええええ！」

フドーリン「じゃあその間に後ろから俺らが攻撃すると！(笑)」

マスター「よし。次は？」

フドーリン「俺だ。バラールに（カチ割り丸で）攻撃」

しかし、サイコロの出目がよくないため7点のダメージ、痛打もなし。

マスター「続いて、アマーギンは呪文準備」

フドーリン「やばい！」

ゴルブラス「やばい、やばい！」

ファラシオンも呪文準備を行い、ゴルブラスが性懲りもなく矢を撃つ。

ゴルブラス「弓発射！バラールに！23」

たり日本テレビ系で全31話が放送されたタツノコプロ製作のSFアニメである。第17話以降は『赤い光弾ジリオン 激闘編』にタイトルが変更された。(Wikipediaより) 当時レーザーサイトを応用した銃のセットが発売されて安全に撃ち合いが楽しめるのがよい思い出



23 弓発射したらまずくないか？

相変わらずマトモに当たらず

ファラシオン「なんでお前そんなに車線変更下手なの！？(笑)」

マスター「せっかく見せ場を設けてあげたのに・・・じゃあ次のラウンド、イニシアチブね。」

ファラシオン「このラウンドは（アマーギンの呪文が来るから）とらないとな・・・」

バックニアのイニシアチブが高かったが、ファラシオンが代りにそれを使う。多くのPCがイニシアチブを取ったがフドーリンの攻撃はふるわず、さっきと同じ。

フドーリン「(バックニアを) 治してやって、フェアリオン」

ファラシオン「いや、そんな事しなくていい、まだ平気まだ平気(笑)」

フェアリオン「ど、どうすればいいんですか？(笑)」

フドーリン「タイミング、言うから(笑)」

ファラシオン「じゃあ、俺アマーギンにく光弾>！おっし、94！」

マスター「でも、光弾は上限があるからなあ・・・どんなに頑張っても8点のダメージなんだよ。」

ファラシオン「そうなの？」

フドーリン「でも、痛打があるじゃないか」

マスター「まあ、それもそうだな・・・」

しかし、痛打のサイコロが振るわず髪の毛が逆立つ、以上。

ファラシオン「そればかりじゃないか！」

マスター「じゃあ、もっと凄いのを撃ってよ。」

ファラシオン「もうねえんだよ、もう魔力1しかないんだよ！」

マスター「では、アマーギンいきます」

アマーギン「魔法とはこう撃つのだ。」

ゴルブラス「お、お師匠さま直々にご指導ですか？」

アマーギン「もういい。その技は私が教えたものだ・・・くらえ！ヒビヤカダン！！(笑)」

ファラシオン「やめてえ！(笑)」

アマーギンがヒビヤカダンをファラシオンに撃つ。これによりファラシオンは36点のダメージ

ファラシオン「くわああああ！！」

フドーリン「大丈夫大丈夫、神秘の宝玉があるから」

マスター「痛打。衣に火がつく、12点の追加ダメージ」

ファラシオン「どこに？(笑)」

マスター「何言ってるの？自分に」

ファラシオン「残り2点なんだけど(笑)」

マスター「更に毎ラウンド打撃2」

ファラシオン「次のラウンドで死ぬじゃん！！(笑)」

マスター「フェアリオンに合図でも送ったら？」

ファラシオン「フェアリオーン、たあすけてくれええええ！(笑)」

フドーリン「ルパン並に(笑)」

マスター「でもって次はバラールなんだけど、フドーリン、いくぞ！」

フドーリン「来な。そう簡単には死なないぜ！」

マスター「・・・29点のダメージ、痛打が・・・あ、「腹部が重傷、打撃+10、毎ラウンド打撃8、行動力-10、4ラウンド麻痺」

ファラシオン「え！？誰が？」

マスター「フドーリン」

ファラシオン「おおおーいい！！」

マスター「で、冷氣痛打が霜焼け、打撃+7。次どうぞ」

ゴルブラス「俺は・・・矢をつがえよう。」

ファラシオン「お前それしかないのな」

ゴルブラス「それしかやることないんだもん。」

マスター「じゃあ、次フェアリオンだが・・・回復させるか。えーと・・・じゃあわかった。フェアリオンが<癒し50>を使った。ファラシオンは打撃を5~50だけ回復する」

この結果23点のダメージを回復させた。とりあえずファラシオンは命を繋いだ事になる。
そしてこの後奇跡が起こる

第7章 運命に決着を

ゴルブラス「まあないよりかは遥かにマシか。」

ファラシオン「でも、俺もう魔力ないんだよ」

フドーリン「魔力回復するだろ。宝玉で。」

ゴルブラス「あれ？でもなんかアイテムもらわなかったっけ？」

ファラシオン「あれは鍛錬を使うんだよ。死ぬんだよ。」

マスター「でも最悪でも2個使えるじゃん。打撃20までなら平気なんだから・・・ドロップ2個使ってギリギリの体力になって<火弾>撃ったら、マスター的にはちょっと格好いいかなあって」

フドーリン「とりあえず呪文準備してから考えた方がいいとおもう(笑)」

ということで次のラウンド。ファラシオンが無限ロールに成功し、通常1-100のところを304をマークしてしまう。

マスター「さすがにそこまでイニシアチブ出されたら、行動になんかボーナスつけてもいいや(笑)」

ファラシオン「じゃあさ！ドロップ2個使って魔力回復して、<火弾>をぶちかます！なぜか呪文準備も無視！(笑)どうだ？これ！」

マスター「・・・」

フドーリン「300だよ！」

ゴルブラス「超速発射だな！」

ファラシオン「でも、どっちに撃ったらいいんだろ？」

マスター「まあ、それもあるし・・・」

フドーリン「次のラウンドアマーギンは呪文準備だろ？」

ということで、ファラシオンは13点のダメージを受け、7点の魔力を回復させた。この回復した魔力で・・・

ファラシオン「<火弾>！！！」

マスター「で、どっちに撃つの？」

ファラシオン「バラールかなあ・・・」

マスター「でもアマーギンも3度目の復活だから弱くはなっているけどね。中身はスカスカ」

フドーリン「・・・そんな話を聞いてしまったのはなあ」

マスター「まあ俺的には師匠と決着をつけてしまった方がー」

ファラシオン「この野郎！アマーギン！！(笑)お前の事はもう師匠とは呼ばない！ってさっきも言ったけど！(笑)」

ゴルブラス「今度は別のカダンにしようぜ」
フドーリン「お前のヒビヤカダンはもう古いんだよ！」
ファラシオン「わかめカダン!!! (笑)」

ダー————ツッとサイコロの目は無限ロールの99

ファラシオン&フドーリン「わ〜〜〜か〜〜〜め〜〜〜(笑)」
マスター「・・・アマーギンに32点のダメージ、更に痛打。火災に倒れる膝の下の有機物は全て破壊。アマーギンの下半身を吹っ飛ばした。肉体が宿っている部分は無くなった。」
ゴルブラス「でました。わかめ、でました(笑)」
アマーギン「おのれ・・・ファラシオン・・・貴方は・・・」
ファラシオン「帰るべきところへ帰れ!!!」
アマーギン「もうとっくに私を越していたか・・・さらば！」
フドーリン「(ファラシオンに向かって) お前の役目はもう終わったな(笑)」
マスター「といってアマーギンのリッチは崩れ去った。アマーギンは最期元のアマーギンに戻ったように思えるが、消えゆくファラシオンの意識ではわからなかった。」
ファラシオン「さらばだ」
ゴルブラス「きっと気のせいだ(笑)」
マスター「で、(ラウンドの) 最後バラールなんだが」
フドーリン「俺は麻痺」
ゴルブラス「俺だけだな、今度こそ矢を当ててやる！」

などと言っている間にバラールは再度フドーリンに攻撃し、33点のダメージを与える。フドーリンはまだ神秘の宝玉を残しているの、実際は時間稼ぎ。その間に

ファラシオン「ホビット族の意地を見せろ、必要といわれたホビット族の意地を、なんかホビットにし
か出来ないことがあるらしいぞ。」
フドーリン「今までサイコロが振るわなかったのはここに集約してるんだよ。」
ゴルブラス「百鍊自得の極み! ²⁴」

しかし結果は・・・

マスター「以上(笑)じゃ次。」
フドーリン「何もなかったように(笑)じゃあ俺はこのラウンドで(神秘の宝玉を)使うかな。やられは
せん! やられはせんぞお! ²⁵ピカーン」
マスター「OK。フドーリンの体が光り輝きー」
ファラシオン「崩れ去った(笑)」
フドーリン「くずれさっちやうのーー!(笑)」
マスター「で、フドーリン回復、バラール驚き(笑)」

²⁴無我の爆発的に溢れるパワーを左腕一本に集めることにより威力・回転等を倍返しで返球でき更に(無我の境地の)副作用の疲労も最小限に抑えられる。そしてそれを可能にしているのが「手塚ゾーン」(『テニスの王子様』)

²⁵『ガンダム』ね。有名なドズル・ザビの戦死シーン、大破したビッグザムの上でガンダム相手いマシンガンを撃ちまくったけど終了。みたいな。



フドーリン「バラールン！？(笑)フュージョン²⁶かい！？」
マスター「間違えた。で、バラール驚き。で次のラウンド」

さて、事態は好転してきたようで少しずつPCの勢いが戻ってきた。まずファラシオンが
バックニアに「神秘の宝玉」を使用する。

ファラシオン「(バックニア) こいつは回復。」
フドーリン「でも本体は回復しない(笑)」

バックニアのプレイヤーは酔いつぶれて爆睡中。

マスター「こいつ、白い剣持ってるんだからさあ・・・中身のいる人がトドメを刺してもらいたいなあ
とは思うんだが。」

続いて復活したフドーリンの攻撃、カスリ傷で終わってしまう。ゴルブラスの病気がフド
ーリンに感染したようだ・・・ちなみに、そのゴルブラスは弓をつがえて終わる。

マスター「で、バラールなんだが形勢不利と思い、獣を呼んだ」
ゴルブラス「俺が言うのもなんだが逃がさん！(笑)」

このラウンドはコレで終了。バラールを逃がさないようにしないとイケないのだが

フドーリン「敵に背を見せるとは落ちたなバラール！」

しかし、威勢に反してまたしてもかすり傷。

バラール「モルドールまで来おい！」
ファラシオン「じゃあく痺れ雲>！バラールの獣に。」
マスター「ふむふむ、なるほど。」

この一撃、バラールはともかく、獣の方にテキメンに効いた。

フドーリン「ある意味おいしいね」
ファラシオン「ダーリン、ダメだっっちゃあああ！(笑)²⁷」
マスター「おいしいと思うよかなり。お・・・あら？『電撃が突き抜けて神経系全体が恐慌に陥る。ば
ったり倒れて12ラウンドで死亡』明らかに飛べなくなった」
ファラシオン「どうだ、バラール、逃がさんぞお！！」
ゴルブラス「おいしいなあ。」
バラール「やはり最初から最後まで貴様が最強の敵だったようだな」
マスター「と言ってバラールは黒い剣を抜いてファラシオンに向かってくる」

²⁶ はいはい、ドラゴンボールね。このページ脚注多すぎ！



²⁷ 少しわかりにくくてごめん。『うる星やつら』ね



ファラシオン「じゃあバッカニアがバラールに攻撃するよ」
フドーリン「ゲロ吐いている場合じゃない!(笑)」
ファラシオン「バッカニア Mk II! いきます!」

しかし、出目がよくない。かすり傷。ちなみに、戦士連中が本来の力を発揮していればもっと早く終わっていたんだけどなあ。

マスター「で次は？」

ゴルブラス「俺」

ファラシオン「よし、お前いいところ残しておいたんだからな。」

ゴルブラス「よし! 今度こそ! 一発くらい当たってね (サイコロを振る)」

.....

ファラシオン「お前なあ、ある意味すごいよ。別のゲームだったらお前かなりすごいよ(笑)」

マスター「はい、はい。次のラウンド。イニシアチブ。(俺はゴルブラスが決めるかバッカニアが復活するかで素直に終わりたいんだけどなあ)」

次のラウンド、フェアリオンがまず最初だが、バラールがファラシオンに攻撃する事はわかっているの

マスター「さて、何をしてほしい？」

ファラシオン「いろんな事してほしい(笑)」

フドーリン「あんな事やこんな事もしてほしい(笑)²⁸」

とはいえ、最終的には回復させる。32点の回復である。

ファラシオン「やったああああ!」

マスター「じゃあバラールの攻撃、ファラシオンね。.....やっぱやめた。ゴルブラス、ファラシオン近いよね」

ファラシオン「俺ら? 俺後ろにいるんだもん」

マスター「ゴルブラスだって後ろだぜ」

ファラシオン「.....来んなよお前!(笑)」

ゴルブラス「おま.....人のせいに.....」

マスター「ということで、ファラシオンとゴルブラスに薙ぎ払いね。」

ゴルブラスを狙った攻撃ははずすが、ファラシオンへの攻撃は42点のダメージ

ファラシオン「はあーーーーー!？」

ゴルブラス「危ないところだった.....」

ファラシオン「一気に瀕死になったよ」

マスター「痛打入れるとダメだろうな.....『片足を切断。倒れて意識を失う。』」

²⁸ http://www2.plala.or.jp/vaio/L&M/LOGIC&MATRIX/diary/text_over18_char.htm(LOGIC&MATRIX より)



フドーリン「ゴルブラス（神秘の宝玉）使ってやれ」
ファラシオン「ああああ、足が・・・早く治して」
ゴルブラス「フェアリオン持ってないの？」
フドーリン「お前まだ持ちたいのか？(笑)」
ゴルブラス「俺いまつがえてんだよ」
マスター「足を覆っていたものは冷氣によって全て破壊」
フドーリン「ついにお前も下半身を出すようになったか(笑)」
マスター「さてと、バラールの一撃によってファラシオンは気絶した。」
バラール「あとはお前だ」
マスター「と言ってフドーリンに振り向くよ」
フドーリン「(ゴルブラス) 後ろ向いたぞ、バカにされてんだよ。」

中身のいない時にバックニアの攻撃はしても無駄なだけ、続いてゴルブラスが
ゴルブラス「お、俺をバカにするなあ！(笑)」

しかし、出目は平凡。ダメージも平凡
ファラシオン「ホビットなど相手にしなくていいって事を裏付けたな(笑)」

フドーリンも続くが、相変わらず呪いに感染中。

続いて次のラウンドになり、まずはバラール

マスター「フドーリンとバックニアに攻撃するよ（薙ぎ払い）」
フドーリン「そんな余裕をかましていいのかね」
マスター「出目を見てから言うがいい！じゃまずはバックニア・・・いや両者共 26 点のダメージ。強烈か歯痛打で決まるからなあ。まずバックニア『脇への攻撃、打撃+4、1 ラウンド行動力-10』フドーリン『胸に軽傷、打撃+3 毎ラウンド打撃1 1 ラウンド麻痺』！」
フドーリン「そんだけ？」
マスター「いや、これから冷氣ね・・・あーあ、バックニア『片足への一撃、転倒。3 ラウンド麻痺、片足が凍傷になる』、フドーリン『背中を凍らす、毎ラウンド打撃2、1 ラウンド麻痺、背中にあった木製品は役に立たなくなる』」
フドーリン「背中にあるかわからないけど、お守りはあるよ、砕けていいかな？むしろそれを俺は望んでいるんだけど(笑)」
マスター「・・・砕けた(笑)」

戦士二人が重傷になったところでフェアリオン。ファラシオンを復活させるか、フドーリンの麻痺を治すかで迷ったが・・・

マスター「フェアリオンが神秘の宝玉を使うの？」
ファラシオン「そう(笑)」
フドーリン「何の疑いもないな(笑)」
マスター「(NPCに持たせるかい!) じゃあ、気絶からは回復させてあげよう。」
ファラシオン「神秘の宝玉じゃなくて？」
マスター「もちろん。」
ゴルブラス「足がもげているけどな！」
ファラシオン「あ、『雷弾の杖』が一発残ってた、足がもげてても使うけどね。」
ゴルブラス「次の矢が外れたら（神秘の宝玉）を使ってやるよ。」

フドーリン「エルフの里に帰ればいくらでもあるから(笑)」

マスター「ないやろ(笑)目標を即座に目覚めさせる<活>の呪文。ファラシオンは打撃が1になって復活した」

ファラシオン「足があああああ！?(笑)」

ゴルブラスは矢を放つが相変わらず、そして麻痺者が多いので次のラウンドになり、イニシアチブで復活したばかりのファラシオンが先制

ファラシオン「じゃあ、『雷弾の杖』いきます！バラールも俺が葬り去ってやる！ドーン！」

意気込みとは異なり、出目は微妙。15点のダメージに痛打は・・・

マスター「『激しく帯電！打撃+10、行動力-10、1ラウンド麻痺』

バラール「まだそんなのがあったのかあ！！！」

ゴルブラス「見たかあ！」

ファラシオン「お前じゃねえ！！(笑)」

マスター「でバラールはこのラウンド行動機会を失うと。さあこのチャンスに何かしてくれ(ゴルブラス)。」

ゴルブラス「俺の矢はここで凄いい目を出すと見たよ。」

ファラシオン「期待してるぞお・・・」

マスター「矢撃つのやめたら？」

ゴルブラス「だって、それしかすることないし・・・」

ファラシオン「サイコロででかい目が出ればいいんだよ、できれば！(笑)」

ドキドキしながらサイコロを振るが出目は(d00)で40。

マスター「えーと(お、そうか。まあいいか)・・・えーと、実は今ので丁度倒したんだけど・・・」

ファラシオン「え？そうなの？」

マスター「まあ燃えたり、電撃くらっていて、ダメージは累積されていたんだけど、最後はこいつの矢でビシッとあたって・・・」

ファラシオン「ギャグかよ！ギャグに見えるな？ホビットが倒したように見えるな」

フドーリン「巨大なダムもアリの巣から崩れ去るという事を思い知れ！！(笑)」

マスター「ゴルブラスがバラールを倒した！！(笑)」

第8章 その後、(略)

バラール「お～の～れ～」

マスター「といいながら、バラールは崩れていくが、ところが黒い剣が唸り始めてバラールの体は修復されているような気がする」

ファラシオン「白い剣だ！白い剣でなんかするんだ！！ホビット！」

フドーリン「俺はもう麻痺ってる。ホビット、お前しか出来ない、お前しかできないんだあ！！(笑)」

ゴルブラス「白い剣で黒い剣を斬る！！！」

マスター「やるんだな。OK・・・黒い剣と白い剣がそれぞれ断末魔の悲鳴を上げー」

ゴルブラス「俺も断末魔をあげるから、ヒィヒィヒィ！(笑)」

マスター「いや、凄まじい光と衝撃によってゴルブラスは吹っ飛んでいった」

ゴルブラス「また吹っ飛んだ(笑)それはいいから俺に宝玉を(笑)」

マスター「2つの剣は絡み合い、砂となって消えていった。」

ファラシオン「これが・・・黒い剣と白い剣の運命」

フドーリン「バラールは？」
マスター「バラールも砂となってしまっている。」
フドーリン「哀れな奴・・・」
マスター「で気がつくど、周りの戦いはとっくに終わっていた(笑)」
ゴルブラス「俺達だけがポツンと残って(笑)」
フドーリン「みんな帰っていったやつた？(笑)」
ファラシオン「こんな大騒ぎしているのに、わかめカダンとかいって(笑)」
ゴルブラス「じゃあ、とりあえず神秘の宝玉を使ってファラシオンの脚を治すよ」

マスター「ということで、ペレンノール野の戦いは光の勢力に軍配があがりました。」
ファラシオン「ゴルブラス、最後お前がいなければ危なかった。という事にしておこう(笑)。フェアリオンもいたからね」
ゴルブラス「NPCだからね(笑)」
ファラシオン「ホビットがいたからね、という事にしておこう」
マスター「というわけで君たちはボロボロになってミナス・ティリスに帰り、アラゴルンに率いられて黒門の前で戦った。まあ時間はあるが戦いをする事もあるまい。たくさんのオークとたくさんのトロールと戦いました」
ファラシオン「あれか！」
フドーリン「一度トロールとやってみたかったんだよね。」
マスター「という風に戦っている内に、指輪が葬り去られた。」
ゴルブラス「落としちゃったの？」
マスター「落としちゃったのとか何かと一緒に落ちていった²⁹。サウロンは急速に闇の力を失って、君たちの周りからもオークやトロールも逃げていった」
ファラシオン「敵が逃げていく」
マスター「人間もエルフも光の勝利に沸き立ってエンディングを迎える事になる。」
フドーリン「そう、じゃあ黒門あけてみよう。」
マスター「一人じゃムリ」
ファラシオン「じゃ俺も」
ゴルブラス「俺も」
ファラシオン「ホビットとエルフが加勢したんだからなあ、開けられないわけないよな」
マスター「(3人でもムリだったの) 君たちの活躍は正史に残される事はないとはいえー」
フドーリン「ゴルブラスが尾ひれつけて吹聴して回るから。お前が言うから歴史の闇に葬り去られるんだよ。お前が歌うから(笑)」
ゴルブラス「どんなオチだったんだよ」
マスター「さて君たちのところにガンダルフが現れた」
ファラシオン「ミスランディア・・・」
ガンダルフ「ご苦労じゃった」
ファラシオン「我々は任務を果たしたのだろうか？」
ガンダルフ「もちろんじゃ！これ以上ないくらいに立派に任務を果たしてくれたわい！」
ゴルブラス「だろう！！(笑)」
ファラシオン「言わせてやろう」

²⁹ ネタバレ。

ガンダルフ「(まあ、今日くらいはちょっとお目こぼししてやるかの・・・)で、お主達はこれからどうするのじゃ？」

ファラシオン「私は西へ帰ろうと思う」

ゴルブラス「じゃあ俺は北」

フドーリン「俺は残党狩りに出よう」

ガンダルフ「ファラシオン、お主もこの戦いで傷を負ったんじゃから、ヴァリマールで癒してくるが良い。灰色港のファラシオンという名前もそのためかもしれないの。」

ファラシオン「うむ。その時が来たようだ。」

マスター「で、君たちはガンダルフと一緒にロスロリエンに帰ってきた。ガラドリエル様も君たちを迎えてくれている」

ゴルブラス「お迎え！ご苦労！」

マスター「・・・・・・・・」

ファラシオン「ん～？なんじゃお主は？」

マスター「とりあえず勇者と言う事で歓迎されているよ」

ゴルブラス「神秘の宝玉が足りません(笑)」

ファラシオン「余ったら返すんだよ！」

マスター「・・・・で、誰かバッカニアのリアクション取ってくれない？何かしないとイケないような気がする」

ファラシオン「俺もさっきからそれ思ってた」

バッカニア (ファラシオン)「俺ががんばったあ！(笑)」

マスター「でロリエンからどうする？」

ゴルブラス「俺はホビット庄には帰らん」

ファラシオン「帰らないの？どうして？ウソがばれるから？」

ゴルブラス「何を言う？」

ファラシオン「このほらふきホビット！(笑)」

マスター「フドーリンは？」

フドーリン「残党狩りに出る。オーク共をぶち殺す？」

ファラシオン「あまり服を破くなよ」

フドーリン「服を破くう？葉っぱ1枚で何を言うか(笑)」

ファラシオン「ガラドリエルに指輪と短剣を返そう、西の地へ旅立つのにはいらなんでしょう。」

ガラドリエル「まだ西に旅立つのには時間があります。今回の旅の話私たちに聞かせてください」

ゴルブラス「よし、任せろ！(笑)」

さて、西に灰色港とヴァリマール、その手前にホビット庄、北にビョルン族の故郷があるので帰路を考える事になる

ファラシオン「俺もホビット庄を通るのか」

マスター「裂け谷に移動してもいいけどね。」

フドーリン「お前を送っていこうか？」

ファラシオン「バーサークしなければな」

フドーリン「バーサーク？ああ、俺の服が脱げているところか！(笑)」

マスター「いや、今回はちゃんとしたエルフの服をもらった」

フドーリン「エルフのちゃんとした服って葉っぱ？」

ファラシオン「伸縮性？相当伸縮するよな(笑)」

マスター「いやいや、戦闘もしないんだから、服を着ててもいいでしょう。」

フドーリン「いやいや、すまんすまん(笑)」

ゴルブラス「あの世へ行っても(笑)」
ファラシオン「・・・バッカニアにもよろしく」
フドーリン「いや、奴にはもう会う事はない(笑)」

ということで、ファラシオンは旅立っていった。その後フドーリンとゴルブラスは二人で闇の勢力の残党狩りをしたが、その後二人を見たものは誰もいない・・・

ファラシオン「ボンブリオンでもよかったんじゃないのか？」

シナリオ作成メモ

やあ終わりました。お話にお付き合い頂き、ありがとうございました。

シナリオ作成メモも何も、最後の対決なので対決を中心として第2形態とかバーンパレス突入とかせず、戦いのみにシナリオは絞りました。まあこれは予告どおり。

さて最後ですから感謝を兼ねてキャラクターの総括でも行いましょう。(ありがたい順)

まずはファラシオン。とりあえず感謝感謝です。第1回からドラマチックに話を展開する上でちゃんと物語のポイントとなる役割を演じてくれたし、戦闘でも魔法使いとして活躍してくれました。時々素が出てきたとしか思えないときもあったけど、それはそれでよし。敢えて言うならもう少し想像力溢れる魔法の使い方をして欲しかったけど、仕方ないでしょう。

フドーリン。野伏のくせに前線で斧を振るったり、服を着なかったりと笑いの面で活躍した、だけではなくバラールとのライバル対決は存分にこちらを盛り上げさせていただきました。気がついたら魔法使いのファラシオンと好対照を為していたのな。フドーリンについてはまだエピソードを追加する余地はあったのだけど、まあバラールとの絡みだけで充分楽しいからいいや。と。

ゴルブラス。本当はこの位置バッカニアだったんだけど、参加回数は少ないながらもいいところはきっちり最後まで占めてくれたゴルブラスです。ロード・オブ・ザ・リングをオマージュしている以上、ホビットには(戦闘以外で)活躍してもらいたかったのですが、周りの協力もあって対アマーギン、対バラールと素晴らしい、指輪物語らしい活躍してくれました。多謝。次はもうちょっと普通に活躍できるキャラクターでやろうね。

続いてゴルブラスに抜き去られたバッカニア。もう白い剣までくれてやったのに何だあの最後の体たらく。まあいつかは予告通りマスターやらせるので、頑張ってくれると思っています。私もできるだけ、フォローに回るし。だから他のキャラクターの言葉を取るな。あと酒を飲むなどは言わないが寝るな。

最後になってしまいました。ジョンドレド、笑い所はちゃんと持って行ってくれたけどおバカな田舎者で終わってしまったのが残念でなりません。ローハンの騎士という設定なんだからやりようによっては大活躍だったのに実に惜しいです。次回はもうちょっと動きやすいキャラクターをお願いします。

本当に最後、マスター面での反省。置いてけぼりの設定が多かったり、回収していない伏線が何気多いのはやっぱり反省です。マスタリング面については、結構忘れていたルールとかもあって思い出しながらやったりしてました。実は。まあ元々ルール自体が(「痛打」は面白いにしても)かなり複雑かつバランスの取り方の難しいルールだったのでカンベンしてください。

まあ何にせよやりたい事はやれて満足はしています。

みなさん、お疲れ様でした